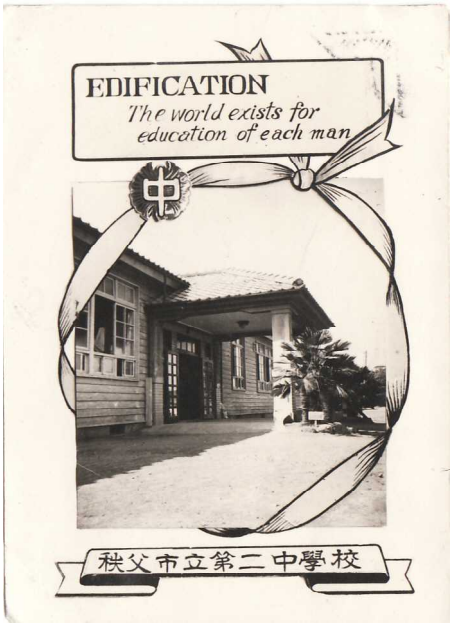
第3節　秩父市立秩父第二中学校に入学

1. 中学1年生

中学校に入った。1年生の担任は八木斌先生、2年は新井万作先生、3年は山口先生だった。八木生は母の友達であった。部活動はテニス部だった。音楽部に入りたかったが、素敵な女の子ばかりで、男は一人もおらず入れるわけがない。ピアノを弾きたかったが、それは夢のまた夢でしかなかった。だからテニス部だった。テニスボールは柔らかい軟式ボールだから、後になってやった硬式テニスには役立たなかった。硬式テニスボールはドライブをかけて打つとホームランになってしまう。運動神経は弟の方が優れていた。弟の方が学力も優れている。私は姉が教えてくれても、小学1年の引き算の一件以来、姉が教えると思考力がストップして頭が働かない。父が教えると一層、乳飲み子の時に医者と間違えて火をつけたように泣いた一件が尾を引いて、恐怖心が先に立って頭が働かない。姉も父も諦めた。二人して前は馬鹿だという。教えてくれなくても優秀ではないが、それなりに学力があって、何とかついていったから、成績ではあまり叱られはしなかった。ただ、母は私が上位でないことが不満であった。弟は、姉や父に教えてもらってグングンと成績を上げたし、運動能力も目上の私と一緒に遊んで、同じことを小さい頃からやっているので、同い年の友達の中では上達が早かった。



当時の秩父代に中学校玄関

学芸会

中学1年の時に学芸会で独唱した。伴奏者は私が憧れていた好川さんだ。東京から転校してきた女の子で、とてもピアノが上手だった。悪ガキどもに冷やかされるのがとても恥ずかしくて、つらいものがあたが我慢してステージに立った。終わった後、ともだちは誰も冷やかさなかった。

2. 中学2年生

中学2年の頃から変声期に入り、高校2年位まで声がまともに出せかった。ひどいときにはドからラまでしか出なかった。私は友達が少なかったが、何人かは仲の良い友達がいた。渡辺君もその一人で、家によく遊びに行ったりしていた。二人で勉強しようと渡辺君の家に行っが、勉強しないで遊んでばかりいた。ある日渡辺君が、家に勉強を教えてくれる先生が来るので遊べないという。それ以来、渡辺君とは遊べなくなった。しばらくすると渡辺君の成績がグンと伸びて、トップクスに仲間入りした。後になって母から聞いた話だが、渡辺君は大学を卒業して以後、助教授になったという。羊山公園に松本君という友達がいた。学校の行き帰り、いつも一緒だった。家の近くでよく遊んだが、他の男の友達が第二反抗期に入って、心の中が複雑に揺れ動く中で、ある日私を裏切った。悪ガキの方についてしまったのだ。その日以後、しばらくの間、学校の行き帰りが、本当に淋しかった。

3. 中学3年生

こころ

テニス部にも山下君という仲の良い友達がいた。
テニスは上達したが、代表選手に選ばれるほどに上手にはならなかった。それでもテニスが好きで、日曜日にはいつも山下君と学校に行ってテニスをして遊んだ。私は中学3年になってもまだ子供で、心の内面など知らなかった。休憩しているときに、他の友達の話になった。「あいつよりは、僕の方が上だな」と言ったら「じゃあ、俺の方が、お前より下なのかよ」と言い返された。「ええ!」思わずその子の顔を見ると、何とも神経質で複雑な表情で私を見つめていた。友達への思いやりなど、その時まで、私の心にはなかった。その時になって、初めて相手の心にも気をつかわなければいけないことを思

野坂の家にて

い知らされた。以来、私は神経質な人間になった。再び天真爛漫にもどるこができたのは、中年以後になってである。

日記帳

中学3年の頃に父が日記帳を買ってきて、つけ始めた。毎日書いていた。とりとめがなく拙い文章だが、毎日書いていた。文章はどうでもよい。毎日書いていることに意味がある。後には毎日は書かなくなっが、気がついたときに書き連ねて、成人しても、かなりの年になっても書いていた。今はもう書いていなが、悩まなくなったというのが正直なところだろう。書いていた頃は、書き連ねながら、頭の中を整理ていたような気がする。一通り書き終えると、気が済んで眠った。

二冊目の日記帳

中学校時代の手記－抜粋－

今日で補習は終わった。学校から帰ってきて、補習が終わって心にゆるみがあったらしく、炬燵に入たら眠くなってしまった。いくらかうつらうつらしていたら、久雄が来て僕の足を蹴飛ばし始めた。僕はいたいから足を引っ込めた。今度は引っ込ませたなりに蹴飛ばす。しゃくに障ったから「うるさい!」とどなった。久雄はぎくっとなったらしかった。顔には出さず、2回続けて僕の足を蹴飛ばした。今度やったらとっちめてやれと思っていたら、案の定一層強く蹴飛ばした。誰だって、こうしつこく蹴られては堪忍袋の緒がきれるだろう。
僕は追いかけけていって、久雄の頭を二つぶった。久雄はぶたれたから半泣きで、僕にかかっくる。僕はもう構うものかと思って、3～4回ぶって逃げ出した。そこへ母が来て「泰雄!」とどなる。僕は逃げるが勝ちと一目散に外へ逃げ出したら、「お前はもう家に寄せないよ」という。母が外に出たのを見届けて、僕は家の中へ入った。僕が母に追いかけられる必要が少しもないのに、母が家の中に入ってきた。母にうんと叱られた。久雄もうんと叱られた。母は、こんなにひどいけんかをしては、世間様に対して外聞が悪いという。僕は母の真剣さが心を強くうった。このとき初めて母に親切をつとめようと決心した。それから、弟に対しても親切にしようと思った。

1956年3月1日（木）

ぼくの同級生はみんな女性のことばかり気にしている。学校に行くと女の話、友達と帰ってくる途中も女の話、友達と話していても、みんなに変なことを言われて悲観していることなど、「どうしたらよいかと聞れる。僕は何て答えていいかわからない。だから「あんなことなど気にするな。ほっとけほっとけ」というより他ない。福村に話しかけられるのが一番多い。「おい、また古守なんかに言われちゃった」「何を」「この間、例の新井文子が、福村君の手帳に私の住所書いてくれない?って来たんだ。俺困っちゃった」これでは僕は何て答えていいかわからない。

今日は耳鼻科の医者に行ってきた。院長先生に鼻というものは、2～3回では治らないのだよと言わてしまった。学校で第6時にトスカニーニの歌劇「ウイリアムテル」序曲を他の音楽の先生が聴かせてくたが、みんな聴いていなかった。やはりNHK交響楽団よりNBC交響楽団の方が1枚上手である。僕がNBCの方に聞き慣れてたからかも知れないが、NBCの方がとてもよくそろっていて、お互いの気持ちが一致ているような気がする。それから、僕の持っているレコードより2倍くらい速いということである。嵐のとこなんか、もうまたたくまにおわってしまった。

1956年3月8日（木）晴れ

入学試験第1日目、国語、社会、理科、音楽があった。平均点50点とみる。福村がまた遊びに来た。山口も連れていた。5時半頃急に福村が外に出て、自転車でどこかに行ったら、山口が帰ると言い出しので、福村を迎えに行ったら、やっぱりあいつの家の辺りをうろうろしていた。このことを父に話したら「お前はそんな奴なのか。他人がそんなことをしていることに、後尻を追うことはない」と叱られた。僕は別に福村があいつの所に行ったから嫉いて見

にいったのではない。山口が帰るといったから迎えにいったのだ。そうしたら福村がそんなことをしていた。

1956年3月9日（金）晴れ

今日は数学、保体、職業、図工の試験があった。数学は、まあよくできて80点はとれたと思う。昨日よりとてもよい。平均点は80点は必ずだ。後は明日の英語だけだ。字引を使うと言うが、どんな試験なのだろう。まあ、当たってみよう。今日おかしなシャンプーを使った。香水のようなナイロン質の入れ物入っている。高いと思ったら10円だった。

1956 年3月10日（土）晴れ

アイヌ民族の熊祭りという面白いものを学校で見せた。3年は卒業気分でワッサワッサしていてダメで、よく解説者の声が聞こえなかった。英語の試験は90点取れればよいと思っている。